

ビノシガ会議

ROUND-TABLE TALK

「美の滋賀」の創造事業として採択されたプロジェクトに関わる一方で、それぞれの立場から、滋賀全体への視点も持たれている辻村耕司さんと服部滋樹さんに、「美の滋賀」の今と未来の話を行いました。「美の滋賀」でコーディネイターとしての役割を果たしている日常編集家のアサダワタルさんが進行役です。



「美の滋賀」の創造事業として採択されたプロジェクトに関わる一方で、それぞれの立場から、滋賀全体への視点も持たれている辻村耕司さんと服部滋樹さんに、「美の滋賀」の今と未来の話を行いました。「美の滋賀」でコーディネイターとしての役割を果たしている日常編集家のアサダワタルさんが進行役です。

アサダ 辻村さんは「近江の祭り研究所」の代表として、服部さんは成安造形大学での秋の芸術祭「MUSUBU SHIGA 空想 MUSEUM」のディレクターとして、それぞれに「美の滋賀」の枠組みでも活動いただいています。まずは、そのことからお聞きしたいと思います。「近江の祭り研究所」では「祭りを彩るデザイン」という展覧会を守山市で開かれました。

辻村 守山市には市・県と国指定の祭りが6つありまして、そのうち3つの祭りから、祭礼具や衣装を集めて展覧会を開きました。展示の中でいちばん迫力があつたのが「馬路石邊神社の豊年踊り」で使われていた剣鉾で、これが京都新聞に記事として掲載されたので、その剣鉾を目掛けて剣鉾研究会の方が来られたりということもありました。その方は、高校時代から剣鉾に魅了されてるらしくて。もちろん、会期を通して地元の方にもたくさん来ていただきました。

服部 高校生で剣鉾ってすごいね。

辻村 実は、滋賀県にはまだまだ剣鉾がたくさんあるらしくて、40年前には京都の祭礼巡行のように、剣鉾を棹に差して練り歩いていたそうなんです。その昔の写真も残っているという話を聞いたり、馬路石邊神社の剣鉾が京都の粟田神社

から伝わっているのですが、粟田神社の方にも展示を見に来ていただきました。

アサダ 展覧会を開くことによって、そこに新しい情報や人が集まってくるということがありますよね。

辻村 そうなんです。それならうちにもありますよって話が出てきやすい。

服部 気になってたことなんですけど、祭りをテーマにした滋賀県の博物館ってないですよね。

アサダ 曳山の展示館や博物館はいくつかありますけど…。

辻村 琵琶湖博物館とかにあってもよさそうですね。今は祭りをテーマにしたという博物館はありませんね。

服部 ですよ。滋賀というのは魅力的なポイントがたくさんあるけど、それが面として見えてこない理由を考えると、やっぱり琵琶湖を中心にしながら、その中心に場所がないということ。琵琶湖の周辺に個性が散っているのが



「祭りを彩るデザイン」展示会場風景

滋賀らしさでもあるけど、その個性をもうちょっとつなげていけることができたら面白くなると思うんです。

辻村 わかります。それぞれが持っているネットワークをもうひとつ大きな輪にするだけで変わってくるはずですよ。

服部 地理的に見ても、山と陸と琵琶湖があって、その川上・川中・川下という流れの中に滋賀の文化があるわけだから、祭りだって琵琶湖の話につながっているはずで。

辻村 「祭りを彩るデザイン」でも協力いただいた下新川神社の神さまは、琵琶湖を渡ってこられてます。また、野洲市の兵主大社の神さまも琵琶湖を亀の背に乗ってきました。毎年12月に兵主大社の宮司は琵琶湖に入り、ご神体を湖水に浸し、その力を回復させます。確かに琵琶湖とつながる祭りはありますね。

アサダ 直接的な役割になるかはわかりませんが、「美の滋賀」の拠点となることを目指している新生美術館(2019年度開館予定)が、その象徴的な入り口となればという話がありますね。新生美術館に足を運んでもらうだけじゃなくて、そこで情報をキャッチして、琵琶湖周辺のいろんな土地に向かうための“玄関”になればいい。

服部 そう、成安造形大学での「空想 MUSEUM」でもそれをやりたかったんです。いま美術館や博物館をつくとすれば、インフォメーションガイドとしての機能が大事で、そこからみんながツーリズムとして動きだしたら、様々なこと



がまわりだすと思うんです。

アサダ 「空想 MUSEUM」という名前にもよく現れていますけど、シンボリックな仮想美術館として、その機能をわかりやすい形で成立させた展覧会になっていました。

服部 そもそも「空想 MUSEUM」は、「MUSUBU SHIGA」でやってる現代のリサーチや近江学研究所の蓄積などを、どうやって未来につないでいくかという視点で編集しているので、余計なところは削除して、ポイントだけをぼん、ぼんと置いていくことで、現場にまで引っ張っていくことができるんじゃないかと考えてつくった展示なんです。テキストや文献があるものは読めばわかるけど、イメージやイメージーションが引き出されるようなキッカケをつくるための展覧会として。

辻村 展覧会に携わっ



「MUSUBU SHIGA 空想 MUSEUM」では、堅田の田舟の展示も

た学生さんからすれば、自分の理解の及ばないところまでかき集めるんじゃないって、自分の関心から焦点を絞ればいいというやり方はきっと関わりやすかったでしょうね。

服部 そのやり方が共有されてからは、学生からもどんどんアイデアがあふれてきて面白くなりました。もうひとつ、「空想 MUSEUM」がやりやすかった理由としては、やっぱり「よその」なんですよ。よその視点だから成立しているところがあって。他のプロジェクトもそうですけど、ひとりでも他府県からの人がそのプロジェクトに参加しているかどうかというの、ひとつのポイントかもしれない。

アサダ 今年の「美の滋賀」に参加しているところであれば、たとえば、「おうみ映像ラボ」なんかもそうですし、「BIWAKO ビエンナーレ」を開催している「エナジーフィールド」も、地元だけじゃないメンバーが交じってますから、軽やかさがあります。そういう視点でいえば、「近江の祭り研究所」は辻村さんと、もうひとり



のメンバーの高岡健二君という組み合わせも面白いですね。ふたりとも滋賀の人ではあるけど、世代が随分違います。親子くらい離れたふたりが協力して同じプロジェクトをやっているという。

辻村 高岡くんとは33歳違います。彼には彼のネットワークや関心がちゃんとあって、「近江の祭り研究所」は、そのうちのひとつなんです。今、20代の子たちの勢いというのもすごく感じていて、だけど、まだ興味のあることすべてに力を注いでいる感じで、どこかでどう滋賀に根付かせていくのかという未来への視点も必要になってくる。そこは、これからだと思います。

服部 時間が経てばより面白くなってくると思います。

辻村 僕らが20代の頃のことを思えば、まったくそういうネットワークもなかったし、こんなにも琵琶湖の周りでいろんなことが起こる状態なんて考えられなかったんですね。あとは、そこにどうやっていろんな人が入っていくことができるか。何かを求めている人だったら、すっと入っていける先がたくさんありますけど、ただ漠然と見ている分には入りこめないという感じもあるかもしれない。

服部 そうですね。確かに、京都みたいに向こうからやってくるコンテンツではないので、こちらから能動的に掘っていくことが必要で、その体力なり気持ちさえあれば、なんぼでも面白いことがあるというのが滋賀の特徴だと思



「おうみ映像ラボ」の上映会で見られた、滋賀の昔の生活風景

ます。
アサダ それをどう知るのが、あるいは知らせるのか。出会う方みたいなものが大事になってきますね。

服部 「空想 MUSEUM」は成安造形大学の次に、東京・原宿にあるVACANTというスペースでも開催したんですけど、それもすごくいい展示でした。ブースごとに各産地の人が入っていて、来場者に直接説明してもらって。実際、展覧会を見に来たOLさんが、高島の料理屋さん「湖里庵」に泊まれることをそこで知って、高島から大津へまわるルートで行けばいいって、今度は大津の人を紹介されて、その次は信楽の人って、どんどん人の数珠つなぎで旅のルートが決まっていっただけですね。来月の休みは滋賀に行きます！ってほんとに彼女は言っていたから、そんな直接的な反応があるんだと驚きました。

辻村 これまでは、県外の人の滋賀観光といえ、湖里庵だとか比良山荘だとか、どこかをピンポイントで目指してくるものでした。それを滋賀全体につなげることができたということへの可能性を感じますね。

服部 滋賀に関心をもつキッカケが歴史だったり、食べものだったり、いろんな入口がありますけど、やっぱり今の若い世代の入口って、僕はヒト・コト・モノの順かなと思って。人を知ることで、

事やモノを知っていくという印象があるかな。

辻村 人というのは触れあうと話が早いし、ぱっと入っていただけますから。

服部 美も食も環境もいろいろ大事やけど、もうひとつのカテゴリーとして、「滋賀の人」というのが立ってくるといいかもしれない。とはいえ、今では滋賀の土地土地で活動する人の存在がかなり明らかになってきていますよね。もちろん、辻村さんもそのひとりだと思うし、滋賀の各地でいろんな人が浮上してきてるのがすごいと思う。
アサダ 「美の滋賀」の活動を通して、少しずつ人が見えてきた感じはしています。

服部 そうやんね。今はいろんなコミュニティが見えるけど、互いに重なりあったりして複雑なところもあるから、もうちょっと個人の方にアクセスできるようになればわかりやすいんじゃないかな。「美の滋賀」という名前ではあるけど、そこに個人が立っていて、「この人が美？」って話になるけど(笑)、その個人から掘っていけば、ちゃんと「美」にたどりつくとか、そんな形になればいい。

アサダ 人にアクセスするためのナビゲーションが見えたら、一見とっつきにくいプログラムだったとしても、そこで出会った人からより詳しい説明が聞けたり、あるいはその人といっしょにご飯を食べに行くようなことだって、実際ありますから。それはもう、「裏プログラム」と言うべき領域かもしれませんが、「美の滋賀」の現場は、そういう楽しみ方にも開かれている。

辻村 人もそうですし、お店というのも入口として考えられると思うんです。「近江の祭り研究

所」の展覧会で、すごくカラフルな色紙で装飾された長刀を展示していましたが、その色紙って、実は展示会場のすぐそばに昔からある紙屋さんでちゃんと売られてるんですよ。祭りのわらじの調達もその店でやってたりとか。

アサダ そうということが知れたら、より入口も増えますし、さらに深く入っていただけますね。ひとつひとつがナマモノを扱ってるようなプロジェクトですから、一律にはやっぱりできなくて、それぞれに楽しみ方が違うことも伝えないかなと。



「祭りを彩るデザイン」で見られたカラフルな長刀

服部 あと、「美の滋賀」で蓄積されているものって、“場を持たない美術館”みたいなものじゃないかな。全部の活動を

ひっくるめると滋賀の一大ミュージアムができるはずで。それぞれに滋賀のアーカイブを収集して展示したり、過去のコンテンツを現代風にアレンジしたり、いろんな活動があるんだけど、そのベースには滋賀で続いてきたものに対するリスペクトがしっかりあるしね。

アサダ 確かに、そのリスペクトがあることの強さと、そこに、それぞれのプロジェクトを主宰している方々の専門性や編集が乗ってくることの面白さが「美の滋賀」にありますね。本日はありがとうございました。



服部滋樹

graf代表。クリエイティブ・ディレクター、デザイナー。滋賀県のブランド力を高めるために発足したプロジェクト「MUSUBU SHIGA」のブランディングディレクターを務める。また、「MUSUBU SHIGA」のリサーチなどを元にして、成安造形大学で行われたセイアンアーツアテンション「MUSUBU SHIGA 空想 MUSEUM 近江のかたちを明日につなぐ」の展示監修を担当。

辻村耕司

近江の祭り研究所代表。1957年滋賀生まれ、野洲市在住。関西学院大学中退後、独学で写真の道へ。雑誌・企業社内誌・行政関係の出版物で写真を撮影。滋賀県にUターン後は「湖国再発見」をテーマに、琵琶湖周辺の風景・祭礼などを撮影。主な出版物に『比叡山を歩く旅』(山と溪谷社)、『近江の祭りを歩く』(サンライズ出版)など。

アサダワタル

「美の滋賀」アドバイザー、「美の滋賀」地域づくりモデル事業トータルコーディネーター。1979年大阪生まれ。“日常編集家”として文筆・音楽・プロデュース・講師業。大津と東京・新橋にオフィスを持つ「事編 kotoami」主宰。著書に『住み開き 家から始めるコミュニティ』(筑摩書房)、『コミュニティ難民のススメ』(木楽舎)、『表現のたね』(モクシユラ)など。